

# 鷗外・『灰燼』試論

山 崎 一 穎

はじめに

作家にとって、自から創造した作品から、また、造型した人物から、完全に自由になり得るだろうか。＼俺の人生をどうしてくれるのか＼＼私の青春を返して＼と、鬼哭啾啾し続ける彼等の怨念を作家は一身に浴び、呪と復讐の刃を背に突き付けられる事はないのであろうか。彼等の阿鼻叫喚の声が、作家の魂を内部から激しくゆさぶり続けることはないだろうか。その時、作家は彼等から逃走すべく、ますます書くことへの衝迫にかられるものではなからうか。しかしながら、彼等の＼恨み＼の一刀から逃げられるだろうか。平生は忘れていた彼等の存在も、作家の志が脆弱になった時、あるいは、現実に荒廃する生を文学的に再建しようとして、自己の青春を追体験し、その中にあった近代を確認しようとする時、眠っていた魂魄は甦り、いっせいに恨みの一刀を浴びせようと迫ってくるのではなからうか。

四十年代の鷗外は、木下左太郎いう所の「豊熟の時代」でありなが

ら、その作品の底流には、生の充実感を求める願望が渦巻いており、＼影と形＼の＼影＼に真の自己の姿が在りはしないだろうか、との吐息は何故であらうか。知命の年になろうとしている鷗外が、『キタ・セクスアリス』（四十二年）、『青年』（四十三年）、『雁』・『灰燼』（四十四年）等に＼青春＼を、それもどこか満たされない挫折にも似た青春を、何故に書かなければならなかったのだろうか。私見によれば、『舞姫』の恨みの一刀のなせる仕業だと思っている。そして、本論考で考究する『灰燼』こそ、『舞姫』の怨念の業火を浴びた作品であらうとも考えている。

『灰燼』は明治四十四年十月発行の「三田文学」(第二卷一〇号)に掲載され、その間二度休載もあったが、(注1)大正元年の十二月号まで拾玖章に渡って書き継がれ、中絶した作品である。今この作品を論ずるにあたって、(一)構造上の二・三の問題点、(二)山口節蔵の精神構造、(三)「新聞国」の行方、(四)モチーフからテーマへという観点から考察し、作品の有機的、立体的把握を試み、それが作家論の端緒になればと念じつつ、論を進めたい。

(一) 構造上の二・三の問題点

『灰燼』はのっけから何物にも驚嘆しない。虚無的な男山口節蔵が、かつて寄宿していた谷田家の主人の葬儀に参列する所から始まっている。そして「谷田の家に自分がゐた時の事を第三者の身の上を想ひ出すやうに、愛惜もなく、悔恨もなく、極めて冷かに想ひ出してゐた。」という回想形式をもって、「貳」章以下が成り立っている。今「壹」章について見ると、寄宿先の谷田家を出た後、九年振りに葬儀の日に会ったお種さんは、節蔵を見て「忽ち非常な感動を受けたものらしく、血の気の少なかつた今までの顔が、一層蒼くなつて、唇まで色を失つて、全身が震慄するのを、咄嗟の間に、出来る丈の努力を意志に加へて、強ひて抑制したらしかつた。」一方節蔵は、「お種さんの燃えるやうな怒の目」に接して、「自分の顔の筋肉は些の顫動をもしなかつた。」という叙述に接すると、下衆の勘繰りではないが、虚無的な人間になつた要因が、お種さんとの恋愛にあつたのではなからうか。などと推測させられる。(注2)それほど「壹」章を読む限り、ニヒリステックな節蔵の風貌といい、怒りに燃えるお種さんの目といい、大きなロマンになる可能性を十分秘められていたといつても過言ではないだろう。因に『灰燼』全体の構成を展望すると、

壹 節蔵はかつて寄宿していた谷田家の主人の葬儀に参列し、旧知牧山に会う。そして、お種さんの燃えるやうな怒りの目を平然と受け流し、かつての谷田家にいた頃を回顧する。

- 貳 谷田夫妻の日常生活の紹介と、節蔵の部屋の点描。
- 参 令嬢お種さんの立ち振る舞いを通して、彼女への関心を示す。
- 肆 お種さんの節蔵に対する悪戯
- 伍 主人の晩酌を「無智の人の天国」ときめつける節蔵の性格の一端を披瀝。
- 陸 節蔵の性格を谷田家側から描写。
- 漆 節蔵の独白。(かつて「灰色の日」から現在のごとく何物をも求めないやうになつた心的経緯について。)
- 捌 お種さんが登校途中、いつも不良青年が挨拶をする事を家人に話す。
- 玖 牧山という人物の紹介。——その息子が同窓の相原がお種さんに挨拶をする事を話す。
- 拾 相原という青年(変生男子)の点描。
- 拾壹 牧山から相原への忠告を頼まれ、好奇心から引承ける。
- 拾貳 相原を床屋から観察する。
- 拾参 相原がお種さんに出会う場面を目撃し、相原と話をつける。
- 拾肆 節蔵の独白。——相原のこと。「書くこと」への衝動。
- 拾伍 牧山は息子から、相原と節蔵との対決の誇張された報告を聞かされる。
- 拾陸 牧山から一段と誇張されて谷田家へ報告。その結果、節蔵を初め書生まで優遇及ぶ。
- 拾柒 谷田家から節蔵へお礼。／級友池田と小説の話をする。
- 拾捌 節蔵は創作意欲をかきたてられ、「新聞国」を書き始める。
- 拾玖 「新聞国」の梗概。

となつていて、未完中絶してしまつている。「壹」章で大きなロマンに

なる可能性を秘めていたものが、具体的に結晶せず消滅してしまっている。構成を展望する限り、節蔵と相原、節蔵とお種さんという二本の糸は、再度「壺」章に照応させながら、一本の糸として書き込む意図があったのではなからうかと推測される。しかしながら、それはあくまで推測の域を出ないので、今そのままにして置いて、全拾玖章の構造について問題点を整理して見よう。

① 「壺」章から「陸」章まで連続的に書かれながらも、「漆」章が書かれるまで約一ヶ月の空白がある。その間書かれた他の作物の影響が、「漆」章に見られないだろうか。

② 「漆」章から「拾伍」章まで連続して書かれながらも、「拾陸」章が書かれるまで三ヶ月間の空白があるが、「拾柒」章の前半までは少くとも原構想であつたろう。そうであるならば、「拾柒」章後半からの「新聞国」の構想は、執筆当初なかったものではあるまいか。

③ 原構想を破って、なぜ突然「新聞国」の構想が入り込んできたのだろうか。

という観点から考察して行きたい。

①はなかなか難しい問題で、確信のある論を展開できないが、日記を見ると、四十四年十二月九日「冬の王脱稿す。」とあり、同月十四日「かのやうに脱稿す。」とあって、『灰燼』とほぼ平行して書かれて来た『雁』も初めて休載していることに気付くのである。『かのやうに』について考えると、「漆」章に対する直接的な影響は発見できない。ただし、「拾肆」章において「節蔵は何の講義を聞いても、学科の根柢に形

而上の原則のやうなものが黙認してあるのを、常識で見出して、それに皮肉な批評を加へずに置かない。」といっている所は、あきらかに秀麿がすべての学問に、いや科学にさえも形而上を認めている点で類似している所ではあるが。更に、推論を下すならば、五条秀麿の未来の姿として、それは節蔵に近いニヒルな風貌が浮び上がってくるのではあるまいか。なぜならば、従来『かのやうに』という見え透いた題名に惑わされて来たのではないだろうか。少くとも八かのやうにVという発想は秀麿ではなく、父の子爵の方がより自然ではあるまいか。子爵は「息子を大学に入れたり、洋行をさせたりしたのは、何も専門の職業がさせたいからの事ではない。追って家督相続をさせた後に、恐多いが皇室の藩屏になつて、身分相応な働きをして行くのに、基礎になる見識があつてくれれば好い。」と考えている。(傍点・山崎以下同じ)それ故、息子の秀麿がハルナツクの事を報じた手紙を見て、「祭るに在すが如くすと云ふ論語の句」を頭に浮べ、今の教育を受けた者が弁証法を以て突きつめて行けば、当然「神話を事実として見させては置かない。神話と歴史とははつきり考へ分けると同時に、先祖その外の神霊の存在は疑問になつて来るのである。さうなつた前途には恐ろしい危険が横はつてゐはすまいか。」と考え、そして「どうぞなるべく穩健な思想を養つて、国家の用に立つ人物になつて帰つてくれ」と願うのである。この父の姿は当時のインテリの中にあつて、少くとも天皇制の矛盾を先取りしているといえよう。それ故に、自分を含めて息子の教育のためには、「祭るに在すが如くす」即ち、「かのやうに」の論を發想せざるをえないだろう。むしろ

ろ秀麿は友人の綾小路から、「八方塞がりになつたら、突貫して行く積りで、なぜ遣らない。」と言われ、「所詮父と妥協して遣る望はあるまいかね。」と嘆息している。結局、秀麿は綾小路のように自由人にもなれず、諸矛盾の中に自己を隠蔽し、懐疑的、虚無的に生きて行く以外にないのである。(注3)

『冬の王』は翻訳であるが、主人公エルリングの静謐な隠棲の心持こそ、鷗外の理想とした所であろう。どろどろしたものを持っている節蔵は、その行路の中途に位置して居るのである。さらに一言付け加えるならば、これらの作品は、『雁』へは影を落してはいないようだ。(注4)

次に②について考えて見よう。『灰燼』執筆の当初から胚胎していた原構想は、「拾柒」章前半までだったのではなからうか。一步譲って考えたとしても、少くとも「拾伍」章を書きあげた地点で、「拾柒」章前半までの見通しはついていただろうと思われる。しかも「拾捌」章以下は明らかに『興津弥五右衛門の遺書』執筆後の構想だと思われる。そうすると問題になってくるのは、「拾柒」章後半と、『興津弥五右衛門の遺書』執筆とどちらが早いだろうか、という事になってくるのである。級友池田の絶対主義的思考パターンに対して、節蔵は絶対主義に安んじ得ない相対主義の立場に立っている。竹盛天雄氏は、「興津、横田論争に似ていなくもない。」としながらも、「鷗外は、あきらかに節蔵の方に身をよせている。」とし、まだ、「乃木殉死を契機とする興津、横田論争をつらぬく絶対主義的思考は影をおとしていないと見るべきだろう。」と言っている。(注5) それはそうに相違ないが、あえて異議を差し挟む

ならば、興津に肩を寄せる寄せ方と節蔵に肩入れをする鷗外の精神構造は補償関係を成していたと考えるならば、『興津弥五右衛門の遺書』執筆以後としても良いのではなからうか。しかも、「拾柒」章後半部が前提となって、節蔵の創作意欲が形を取ってくるのであるから。節蔵の「書くこと」に対する意識は、「陸」章で谷田夫妻の会話の中に窺われる。すなわち、「そんなら何が得意かと云つたら、文章を書くのだと云ふのだ。……わたくしの文章と云ふのは、日本の今の詞で書くのです。」という叙述に気が付く。そして「拾壹」章において、「己は疾うから何か書いて見ようと思つてゐるが、これまで何を書かうと云ふ対象を捉へ得たことがない。」といい、牧山から聞いた相原という「変生男子」の小説でも書いてみようかと考えて見るのである。そして空想を馳せてみるものの、それが「自分の力の感じを満足させたがる欲望の一つに過ぎない」と観じ、苦笑と自嘲のうちに企画を放棄してしまうのが常であったという。しかも、「拾肆」章において、「己はあらゆる価値を認めない。いかなる癖好をも有せない。公平無私である。己が何か書いたら、誰の書く物よりも公平な物を書くから、或はこれまでに類のない *homogène* な文章が出来るだろう。」と云いながらも、「それにしても何を書いて好いか、その材料には見当が附かない」と嘆息している。このように創作意欲だけは以前から持っていたのだから、「拾柒」章前半からお種さんのロマンが発展していても不自然ではなからうに。むしろ短絡に直結するわけではないが、むしろそれこそ原構想ではなかつたらうか。節蔵、池田論争から創作意欲が、「新聞国」へ方向を転ずる事

で、『灰燼』は大きく震れ動き、屈折してしまったのである。

更に③について述べると、書くことへの意欲はありながらも、「暈の上の水練」に終始していた節蔵も「拾捌」章では、「心の底で疾うから何か書かう、何か書かうと思っていた欲望が」強烈になって来たと独白している。しかも「何か」が形を成してから「もう余程時日が立つ」とさえ言っている。驚くことに「併し久しい前から物語の大体の筋立」は持っていて、「新聞国」と名付けられているとさえ云っている。一応何か書きたいという意志の発動は認めるとしても、それが「新聞国」となるという事は、如何にも唐突過ぎはしないだろうか。小説の時間の経過の上では、相原事件後約一ヶ月経ているが、その間に「何か」が多少形のあるものになり掛かつて来」た事は認めるとしても、「併し久しい前から物語の大体の筋立を頭の中に持つているた」と云っている点で、納得しがたい所がある。そこに最初意図したものと違う何らかの要因が介在したものと思われる。内部的に必然性を見出し得ない点から判断して、外的な力が加わった為であろう。そうであれば、乃木殉死に触発されて九月十八日に執筆した『興津弥五右衛門の遺書』が介在していると考えた方が適切であろう。そして、それが原構想を破棄させたのであろう。

## (二) 山口節蔵の精神構造

節蔵の精神は、現在何物をも希求することなく、すべての物を冷やかに眺める透徹した目を持っている。即ち、人間性の心奥に無気味さを秘めた虚無的な風貌を持って彩られている。「壺」章において、途中で

会った巡査に対して、大過去には「馬鹿奴が」と思ったものが、過去においては「気の毒な奴だ」と思い、現在では「そんな反応は頭に起らない」ほどの心境に達していると述べられている。それは僧侶に対しても同じで、「行きなり飛び出して、坊主頭を片端からなぐつて遣りたく思つ」た心持から、「退席」してしまう心境を経て、「平気で」居られる心境にまで達している。更にそれは「お種さんの燃えるやうな怒の目」に接しても、「些の顫動をもしなかつた。」と述べられている如く、平然と醒めきっている。因に節蔵は三十才、お種さんは二十五才である。(注6)

このように醒めきった心境に、節蔵自身如何にして達し得たのであろうか。鷗外が用いている回想に従って、演繹的にたどって行きたい。かつて節蔵自身「暫くの間同じ事を継続してゐると、或る時突然それがひどく詰まらなくな」り、教師に反抗し、あげくの果てに教師の顔をみつめて、「その顔に怪訝や懊懐や憤恚や、色々の情が表現せられて来るのを一種の快味を感じながら見て」いるのである。しかも、こういう日に友人と絶交したり、理由もなく親友の大切にしている笛を砕いたり、「これと云ふ動機もなしに、人に喧嘩をし掛けたり、暴行を加へたり」した「灰色の日」があったと告白している。それが東京に出て来た頃から、「いつ変るともなく変つて来」て、自分で「又来たな」と自覚し、「多小の監督を自分の挙動に加へる余地」が生まれて来たと述べている。それはとりもなおさず、意志の力で抑制し得るようになったという事である。しかも、それすら「無邪氣に小さい家庭の平和を楽んでゐる」谷田

の主人の晩酌が神経に障って来たのを「意志で抑制したのではな」く、自然と止められるほど心境が変化して来たのである。即ち、それは「他人が何物かを肯定してゐるのを見る」につけ、「迷つてゐるな」「気の毒な奴だな」「馬鹿だ」と思うのである。柳田知常氏の言うごとく、

「肯定」に含まれている意味は「自己肯定」と「秩序肯定」であろう。

(注7)「肯定即迷妄と観じ」たが故に、覚醒したのである。それからというものの節蔵は、「世間の人が皆馬鹿に見え」だすと同時に、「言語や動作は、前より一層恭しく、優しく」なり、しかも、「何物をも求め」ず、

「自分の嘲笑するやうな気分を」他人に悟られまいと「自己を隠蔽」して生きて来たのである。そして「一体何物にも深い興味を持たない」節蔵は、いつも「好奇心」のみが旺盛である。それ故に変生男子相原に対するのであるが、いままで「自己を隠蔽」することに意識的であつた意識が、「拾参」章において、変化して来ている点に注目しなければなるまい。怒り心頭に達している相原に、「怒りもせず、激しもしない、極端に冷静」な「恬然たる」態度で接するのである。そして、節蔵は相原に「僕の要求を容れるとか、容れないとか、極めてくれ」と二者択一を迫つたのである。相原の「容れなかつたら、どうしようと云ふのですか。」との反問に対して、「僕はそんな事を前以て考へては置かない。只聞いて見るのだ。」と云つて、「口の周囲に微笑を湛へ」てさえているのである。この節蔵の態度を、「莊子の虚舟の譬と云ふことがある。舟が来て打つ附かつても、中に人が乗つてさへゐなければ、誰も怒らない。それは有道德者の態度であらうが、節蔵の態度には殆どそれに似た所がある」

とさえ言い切っている。まさに驚くべき心的変革ではないだろうか。しかも節蔵は十九才である。

一方、節蔵のお種さんに対する心持はどうであらうか。暑中休暇に入つて、遠慮がちに節蔵の部屋に遊びに来たお種さんに対して、

自分の所へ遊びに来たというのだから、何かのお相手を申し付けられることだろうと思つた所が、一向にそんな様子がないので、自分は又本を読み出した。併し二三行読んでは、お種さんの為事を横目で見ると、そして小さい指のしなやかな、弾力のある運動に、或る自然現象に對すると同じやうな、一種の興味を感じずにはゐられないのである。そして「なる程、矢つ張己れはお相手をさせられるのだな」と思つた。(傍点・山崎)

と、自嘲的ながらも関心を示している。そして、長い休暇中にお種さんとは、「次第に心安くなつて来た」のである。時折するお種さんの「思ひ切つた悪戯」に對しても、怒るわけでもなく、むしろ相方に一種の甘えさえあるといえよう。節蔵が相原と対決しようという朝の叙述に注目したい。

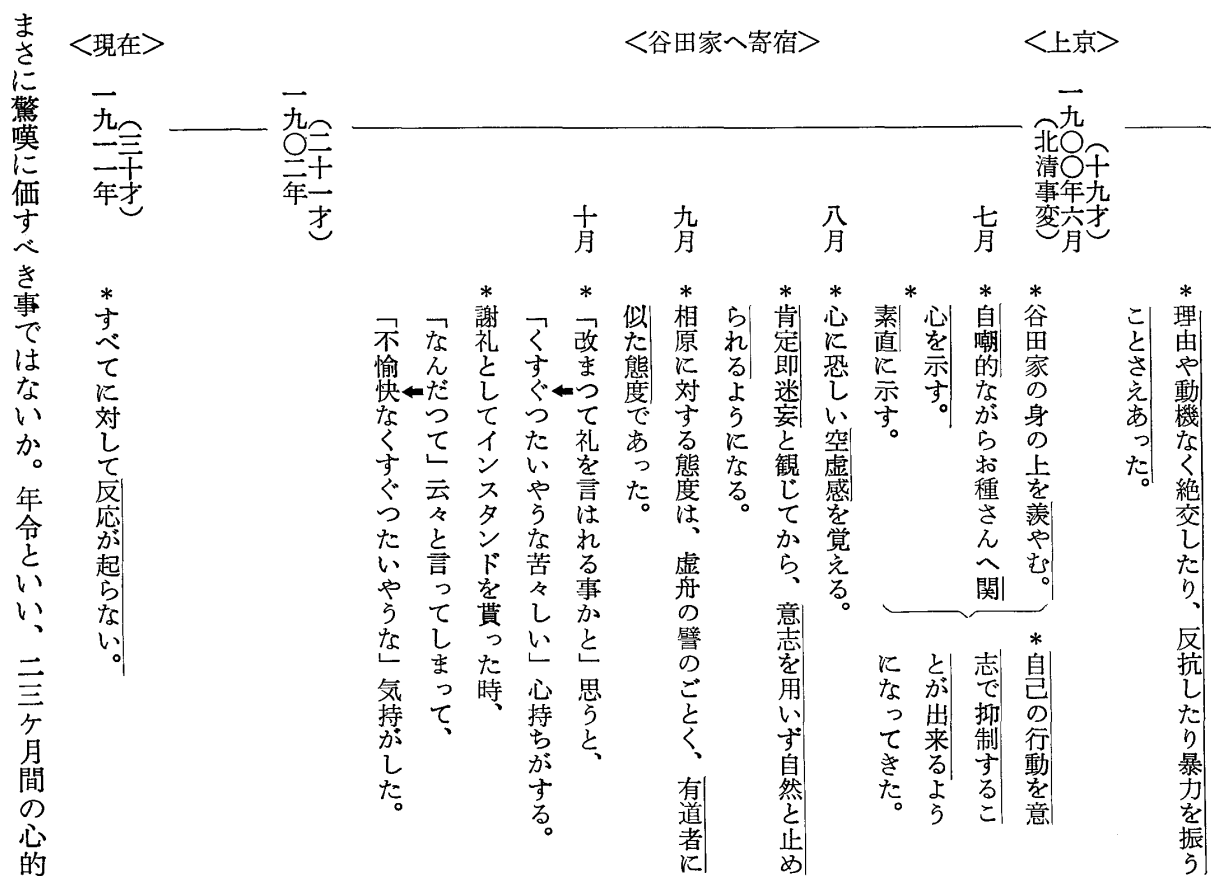
その頃書生の持つた毛繻子の風爐鋪に、学科の本や雜記帳を包んで、節蔵は谷田の邸を出た。いつも門にお種さんの乗る車が来てゐるか、ゐないかを見て、ゐれば心持急いで歩くことにしてゐるのだが、けさはもう車を玄関の前に置いて、自分は蹴込に腰を掛けて、ぼんやりした顔をして、烟草を呑んでゐる。

第二文の前半の主語は節蔵であり、後半は車夫であらう。とすれば、

「いつも」という語が気にかかる。少くとも節蔵が、お種さんへ関心を  
持ち続けていた左証になるであろう。節蔵は相原に「谷田の娘はよし  
給へ。君、あいつはまだ一人前の女になつてゐないのださうだよ」とさ  
え言っている。

とすると、節蔵の周囲の人達に対する有道者にも似た態度や心持と、  
お種さんに対する態度や心持ちとはどうも軌を一にしているとは思えな  
いのだが。この辺に節蔵の無気味さが秘んでいるのだろうが、判然とし  
ない。小説は一九〇〇年六月から十月頃までの記述しかなく、一九〇二  
年節蔵が谷田家を出るまでの一年余が描かれずに終わっている。むろ  
ん、谷田家を出てからの現在までの九年間の空白も埋められてはいない。  
節蔵のお種さんに対する関心がその後、どう動いていったのかは不明で  
ある。この部分に鋭い切り込みを見せたのは蒲生芳郎氏である。氏は特  
に「壺」章に注目し、節蔵を「その酷薄非情な虚無的好奇心のゆえに、  
お種さんと肉体関係を持ち、それをすげなく捨て去り、子を生ませ、し  
かもそれを知ることさえなく、まるでひとごとのように冷淡」であると  
見ている。そして、節蔵の本性を「無道德な虚無」と見据え、「ハマリ  
シヨオなV目を持った傍観者」であり、「デモニックなようにも見れば  
見られる目」の所有者であると看破している。(注8) けれど、鋭い意  
見であると思う。

今、節蔵の心的推移を、小説中に現わされている時間との関連で考え  
て見よう。



変化にしては。しかも、相原と対する時の有道者にも似た面目と、回想をしている現在の心境とはほぼ相似ていると思われる。このように節蔵は、何物に対しても「深い興味」や「強い要望」を持たず、「いつも好奇心のために」動くのみで、「柔和忍辱の仮面を被つて」何物をも希求せず、何物をも「肯定せず」「物の両端を敲かずには置かない」相對主義の立場に立ち、「唯自己を隠蔽し」て生きる男として形象化されている。すなわち、即物的、虚無的な心性に、徹底的な權威否定の刃を合せ持っていると言えよう。それ故、節蔵のこの態度の周囲に及ぼす影響は、崇拜と畏敬とに彩られている。ただこの節蔵の仮面の不気味さを、奥さんは本能的に「気味の悪い、冷たい処がある」と観てはいるが。節蔵は何故に「自己を隠蔽して」生きなければならなかったのだろうか。「家畜の群の凡俗を離れ」る為か。また「自己を隠蔽して」生きると言う事は、どのような生き方なのだろうか、との疑問も浮んで来るのである。自己の受けた創痕に対する痛みなのか、それとも恨み故に、仮面を被つて意識的に傍觀者として生きて行く事を志向しているとも思えるのだ。

とまれ、節蔵の造型の仕方を見ると、少々の屈折はあっても、すでに谷田家の人となった頃から、何物をも希求しない醒めた人間として登場して来ている。その意味で典型的な性格が付与されている。しかしながら、精神の遍歴が発展的に造型されていない所に問題は残ろう。明らかにインクスタンドを貰った時の節蔵の心性の造型は失敗のなにもものでもない。『灰燼』中絶の根本的要因は、この辺にあったのではなからう

か、とも思う。

### (三) 「新聞国」の行方

「新聞国」(「拾捌」章)「拾玖」章)とは、節蔵が構想した小説であつて、劇中劇として、挿入されている。

新聞国は血の出るやうな諷刺である。若しこれが燃えるやうな熱情を内に包んだ作であつたら、もう一層深刻な物になつたかも知れない。併し又翻つて考へて見れば、或る所は氷の如くに冷かな節蔵でなく、は書けないのかも知れない。

ポオの集中にある「鐘楼に於ける悪魔」から強い印象を受けてゐる節蔵は、新聞国を書くのに、風土記を書くやうな平叙法で、国の有様を書いた。巧まずにありの儘を書いてゐるやうで、それが一々毒々しい諷刺になる。(傍点・山崎)

しかも、「今の文壇に粉本のあるやうな物を書く気は無い」節蔵をして、なお、「ポオの物を讀むと、自分の行くべき道を此案内者が示してくれるやうでもあり、又自分の企ての無謀で危険なのを、此先進者が高い処から見て笑つてゐるやうでもあつた。」と付け加えている如く、中々の冒険であると言わざるを得ない。

まず節蔵は「新聞国」の人民を「新聞の種を作る人と、その種を拾つて書く人と、その種を拾つて読む人」と三種類に分類し、政治家、ジャーナリスト、文士、群集、人民が諷刺的に紹介されている。勿論、「新聞国」とは現代社会の展望図であり、「人民を類別して、博物学の叙述



のやうに書いた。その体裁は間々に習作めいた短い話を幾つも挿んであるので、ここに筋書をした程乾燥無味ではなかった」と断わつてはいるが、そこに込められた諷刺なり批判なりは、概説的すぎるくらいがないでもない。そして節蔵の筆は、「新聞国の政変」を書こうと意図するのである。「有力な政治家が出て、Coup d'état のやうな手段で新聞を廃せよう」とし、それにとまって起る「周章狼狽の様子」が目に見えてくる。中でも「或る一組の人達の間に起る会話や、或る街頭に現れる騒動は、濃厚な光彩を以て微細な所まで断片的に纏まつて現れて来る。」と書いて、以後筆を折ってしまったのである。

何物を求めず、何物をも肯定せず、権威否定を地で行くデモニシユな節蔵は、この混沌とした現代社会の展望図を描き切ったであらうが、鷗外その人には描けなかったのは事実である。『沈黙の塔』『ル・パルナス・アンビュラン』や『ファスチェス』『当流比較言語学』を描いた鷗外を以てしても、『灰燼』を描き切る事が出来なかった事も事実である。

何故だろう。中々むずかしい問題である。「新聞国」の政変を描けなかったのではなく、描かなかつたのであると、いつてしまうと、実も蓋もなくなってしまうが、そのようにも見える。つまり、政治的にも文学的にも書くことの危険を感じていたようにも思われる。勿論、公状況（国家）にかかわっている人間として、現代史を書くことの危険を十分承知していたと思うが。

一体節蔵をして「新聞国」を描かせるエネルギーなり、リアリティなりが、鷗外にあったのだろうか。四十五年九月十八日に『興津弥五右衛門

の遺書』を書きあげた鷗外は、同月二十五日にボウの『十三時』を訳出している。この『十三時』こそ、節蔵が影響されたと言っている『鐘樓に於ける悪魔』である。しかも、この作品はボウの集中でも特異なものである。ボウの理論的闘争家としてのジャーナリストの面は『Xだらけの社説』『オムレット公爵』『ボブ氏の文学的生涯』に見られる如く、△毒舌的な鋭い社会諷刺△となって現われている。一方、唯美的神経のアルコール中毒者の妄想は、『アッシャー家の没落』『赤き死の仮面』、詩『幽霊宮』に見られる如く、△外的侵入による楽園の崩壊△となって現われている。鷗外訳の『十三時』こそ、ボウの二系列を兼ね含んでいる点で注目すべき作品である。節蔵が「ボオの物を読むと、自分の行くべき道を此案内者が示してくれるやうでもあり、又自分の企ての無謀で危険なのを、此先進者が高い処から見て笑つてゐるやうでもあった。」という時、それは鷗外の内部に呼応する声であり、自戒の声でもあったろう。

一方鷗外の実生活の面から探つて見るために、四十四年の日記を閲すると、（傍点・山崎）

二月二十二日 石本次官の室にゆきしかど談話することを得ず。

二十三日 石本次官の室にゆきしかど談話することを得ざりき。井上通泰の二人と古稀菴を訪ひ、南朝正統論をなすべきを告ぐ。

二十四日 補充条例改正案に同意し難きを以て、辞職すべき趣を石本次官に断言す。

十月 九日 午より陸軍省にゆき、補充の事を議し、再び上野へ引き返す。

十日 次官以下と補充の事を言ふ。

十月十二日 軍務局より衛生部人事系統を破らんとする交渉を受け、反対す。  
三十一日 軍務局と法制局とにて、補充規則細則中衛生部に不利なる条項を作りて、医務局に交渉せずして決裁を受く。依りて次官に辞職を申し出で置く。

二十三日 次官等の予に留任を勧むるを告ぐ。

二十四日 次官に留任の事を言ふ。

補充条例に関して、 $\wedge$ 辞職 $\vee$ の文字にはとさせられる。因に二月には『青年』の十八・九章が書かれ、『妄想』が執筆されている。更に四十五年の日記を見ると、

十二月五日 二箇師団増設問題のために大臣が骸骨を乞ふに至りたる顛末なり。

十四日 田中義一來て増師論を草せんことを求む。山県公の旨を奉ずるなり。

十六日 岡次官市之助、田中義一がために兵備の緩急に関する詔勅を草す。

十九日 増師意見書を草す。田中義一が椿山公の旨を承けて文を求めたるなり。

二十日 増師意見書を田中義一に交附す。

大正政変の端緒となった陸軍の二ヶ師団増設問題に頸を突込んでいる。『灰燼』の「拾玖」章「新聞国」の執筆を中絶した月でもある。竹盛天雄氏は、増師団問題の日記の記事をさして、「あれほど金石文字のように感情を拒否した文章に、山県の命令で増師論をかくという意味の数語を二度もかきつらねている事実を何と見るか？」と問い、「要するにこ

れらの事実は $\wedge$ 新聞国 $\vee$ の諷刺をささえる主体の挫折とヴィジョンの自己崩壊とを物語って十分である。」と述べている。(注9)確かに一応そのような断言できよう。奇妙な事に、節蔵の $\wedge$ 書く $\vee$ という意識と行為が「新聞国」に結実するモチーフが稀薄でありながら、それを描き切っている。それに対して鷗外はと言うと、「新聞国」執筆のモチーフに十分必然的な要因を持ちながら、遂に描き切れなかったという矛盾を見ることが出来る。自己の主体が対象を十全に領略出来なかった所に、『灰燼』中絶の要因が秘んでいたと言っても過言ではないだろう。

すでに述べた通り、『興津弥五右衛門の遺書』と『十三時』が九月に執筆されており、「新聞国」を描く「拾捌」章以下は、『興津弥五右衛門の遺書』執筆後であることは明瞭であろう。

絶対主義的思考に立ち、何よりも主命を重んじる興津弥五右衛門を通して、忠誠に対する讃歌を送った鷗外が、『十三時』を翻訳し、節蔵をして相対主義の立場から「血の出るやうな諷刺」によって、「新聞国」の政変を描き出そうとした事、精神構造をどう理解したらよいのであるか。どちらもまさしく鷗外の精神構造であり、『興津弥五右衛門の遺書』において、デオソニッシュに謳いあげた乃木將軍への讃歌に対する自己批判と考えるのは強過ぎるだろうか。乃木殉死を始めとして、官僚機構に身を寄せながらも、そのからくりをシニカルな目で眺めている鷗外が居ることを忘れてはなるまい。(注10)それ故、私自身今一度問いたい。先程「新聞国」の挫折を、主体と対象との乗離にその原因を求めたが、鷗外が持っていた批判精神のエネルギは、消滅してしまったの

であろうか。作品として形象化させる為には、芥川龍之介が言っている如く、外国のこととして描くか、我が国の過去の事として扱うしか方法がなからう。

神の善意も悪意も見据えていた鷗外の強靱な精神は、「新聞国」の世界の造型を諦める事なく、形を替えて、『阿部一族』『佐橋甚五郎』『定稿・興津弥五右衛門の遺書』へと受継がれ、再現されて行つたと考えるのであるが、どうであろうか。(注11) 少くとも、現代史を過去の時代に置き替える事によって、『意地』は成立したのである。最初から近代人としてのイデーを、過去の主人公に托す事によって成立している芥川龍之介や菊池寛の歴史小説と異っている事は言うまでもない事である。『意地』を貫く悲劇は殉死の悲劇ではない。阿部弥一右衛門、竹内数馬、佐橋甚五郎、横田清兵衛の悲劇は、欠点のない出来すぎた人間の悲劇なのである。しかも、相手方の力を見抜く事が出来なかった所に、悲劇の根源があつたと言えよう。やや数馬は見抜いていたが、結局武家社会の枠の中の制約から抜け出せなかったのである。その点で甚五郎は見抜いていたと言えよう。

とまれ、鷗外自身官僚機構の内に居たが故に、内部からの觀察に迫真性があり、そこには何とシニカルな目が爛々と底光りしている事か。

#### (四) モティフからテーマへ

鷗外は明治四十年十一月十三日、小池正直の後を承け陸軍軍医総監となり、陸軍医務局長に就任したのである。四十四年師団補充条例改正案に

反対、二月二十四日及び十月二十一日次官に辞意を告げている。結局留任となるが、その間に南北正潤問題があり、その後陸軍増師団問題等に関わらざるを得なくなってくるという微妙な立場。明治から大正へかけて絶対主義国家の演出するドラマの中で、一役も二役も買わざるを得なかった鷗外。かくの如き官界の塵芥の中での生活から一步家庭へ戻ると安穩な生活が待っていたかという点、『半日』や『蛇』に見られる如く、嫁と姑との軋轢の中で、またもや懊悩しなければならぬのであった。それ故、知命を迎えようとしている鷗外にとって、身は俗なるものの中に在っても、心は超俗でありたいと願うのも当然であろう。その願いを込めて真に生きる事の意味を領略すべく、種々な面から照明を当て、生きる事の内実を模索して自己を一步でも高みに引き上げようと苦悩しているのである。その方法論の実験レポートこそ、鷗外の祈りを込めて書かれた作品なのである。そこに軍医森林太郎の文学する目的も意義もあつたのである。とまれ、実生活上の苦悩は、少くとも精神的荒廃を生み出さずにはおかぬ。

四十年代の鷗外の吐息を作品の中にさぐって見よう。『青年』の主人公小泉純一の日記に見られる如く、「生きる。生活する。答は簡単である。併しその内容は簡単どころではない。一体日本人は生きるといふことを知つてゐるだろうか。」と、真に生きる事の意味の欠如を歎き、更に、「現在は過去と未来との間に劃した一線である。此線の上に生活がなくては、生活はどこにもないのである。」と、現在の生活の充実を希求する天啓となつて現われて来るのである。即ち、小泉純一が如何にし

て、自己の青春の内実を獲得し得るかにあったのである。しかし、不幸にして坂井夫人と単なる肉の閱歷のみに終止してしまう。純一自身「一体こんな閱歷が生活であろうか。どうもさうは思はれない。真の充実した生活では慥にない。」という歎きとなつてはね返ってくる。この日々の充足こそ、主人公に托した作者の祈りにも似た願望であつたろう。また、『カズイスチカ』の中で、花房医師の「始終何か更にしたい事、する筈の事があるやうに思つてゐる。併しそのしたい事、する筈の事はなんだか分からない。」と、何物かに駆られて、「目前の事を好い加減に済ませて」、しかも「遠い向うに或物を望」みながらも、しかも把めずにいらだっている姿と對象的に、父のあらゆる物に対して「全幅の精神を以て」処している態度を「有道者の面目に近い」と見ている。

更に『妄想』においても、「自然科学のうちで最も自然科学らしい医学をしてゐて、exact な學問といふことを性命にしてゐるのに、なんとなく心の飢を感じて来る。生といふものを考へる。自分のしてゐる事が、その生の内容を充たすに足るかどうだかと思ふ。生れてから今日まで、自分は何をしてゐるか。始終何物かに策うたれ駆られているやうに學問といふことに齟齬してゐる。」という自己反省は、「自分のしてゐる事は、役者が舞台へ出て或る役を勤めてゐるに過ぎないやうに感ぜられる。」とまで言っている。しかも、「一寸舞台から降りて、靜かに自分といふものを考へて見たい」と云い、足ることを知らない「永遠なる不平家」と断じる時、主人公に托した日々の充足という願ひは強烈であつたろうと思われる。

こう見てくると、『青年』の主人公に托された願望は、作者の腹の底からの呻吟の声であつたわけである。それだけに單なる肉の閱歷に終止してしまつた純一の歎きは、作者の歎きと重さなり、一層悲痛でもあつたと云えよう。しかし、強靱な鷗外の精神は『青年』の中で、文學的形象の問題として解決せずに、思想の問題として解決する方向に轉換させてしまつたのである。その事の当否はともかく、問題に則して論ずるならば、純一と友人大村との對話から新しき青年像として「積極的新人」でなければならぬとの結論に達する。「破壊してしまへば、又建設する」新人のよつて立つ所は「内に安心立命を得て、外に十分の勢力を施」し、「我といふ城廓を堅く守つて、一步も仮借しないであつて、人生のあらゆる事物を領略する」という「利他的個人主義」に彩られている。それは西洋の合理主義の臭いを嗅いだ鷗外は個人主義を容認する一方で、忠孝の道徳をも同時に容認する人であつた。この矛盾する二つの事物を矛盾しない地点で統一しようとした時、この利他的個人主義の思想が生み出されたのであろう。いずれにしても、「人生のあらゆる事物を領略する」とは、真に生きる事の意味を獲得する事であらう。この利他的個人主義こそ、當時の鷗外が獲得した最高の思想であつたと思われる。しかしながら、これは座標軸の原点から延びた横軸の、平面上の思想であつたと考えられる。それ故に縦軸上の思想の展望がない限り、超俗でありたい心を満足させることはできないであらう。

生の充実への願望を天啓とする時、鷗外の胸中に去来したものは、あの若き日ベルリンの大都に立つた歓喜の一瞬ではなかつたろうか。確實

に鷗外の青春はベルリン、ドレスデン、ミュンヘンに在ったはずである。血沸き肉踊るドイツ時代の青春を回顧すると同時に、『舞姫』を想起せざるを得なかったであろう。勿論太田豊太郎即鷗外ではないけれど、どこか一抹の苦さを伴ってきはしなかっただろうか。その苦さは、エリスのみならず、豊太郎の帰国時の心境、即ち「自然科学の分科の上では、自分は結論文を持つて帰るのではない。将来発展すべき萌芽をも持つてゐる積りである。併し帰つて行く故郷には、その萌芽を育てる雰囲気が無い。少くも人まだ無い。その萌芽も徒らに枯れてしまひはすまいかと氣遣はれる。そして自分は fatalistisch な、鈍い、陰気な感じに襲はれた。」(『妄想』)という嘆きをも含んでいる。それ故、ベルリンの青春とは直視できにくいであろう。それ故、現在を癒してくれる本源的力を、ドイツ留学以前の青春に求めるのは当然であろう。そこに『キタ・セクスアリス』の書かれる一要因があつたのであろう。情のみであつた『キタ・セクスステリス』にかえて、情を知との充一の中で志向しよう、四十三年二月号から四十四年八月号にかけて『青年』が書かれる一因があつたろう。『三四郎』あつての『青年』であるが、純一を坂井夫人との肉体的交渉の中に振りまわすことによって、純一を成長させようと企てている所に『三四郎』に見られない新しさがあると言えよう。もつとも、それがかならずしも成功してはいないが、『青年』は小説の背景であるボルクマンの公演から考へて、当代の青年の青春の一面をのぞかせている。

四十四年七月十六日に『青年』を書きあげた鷗外は、九月号から『雁』、

十月号から『灰燼』という具合に同時に連載を始めるのである。何度かの休載があるにもかかわらず『雁』の完成は稲垣達郎先生の言う如く、「はじめから全体についての見透しがあり、基本的なところで、手ごわい抵抗がなかったゆゑであらう。外見の苦渋は、反対に、内実の平穩を意味するものと考えられる。」とすれば、(注12) 鷗外の留学前の青春はかならずしも、現在の生の荒廃を癒してくれる活力にはなり得ない。どうしても鷗外は『舞姫』の世界を直視せざるを得なくなつてくるのである。「嗚呼、相沢謙吉が如き良友は世にまた得がたかるべし。されど我脳裡に一点の彼を憎むこゝろ今日までも残りけり。」という結びの文章における「憎むこゝろ」は、相沢を憎む心と同時に、己れを憎む心でなければならぬ。とすればこれは両刃の刃であらう。それ故、この「憎むこゝろ」はまた冒頭部の「恨み」と重なつてこよう。エリスを捨てて帰国した豊太郎と相沢とのその後の生き方は同じではないはずだと思う。心に「一党の翳」を抱いている豊太郎の心奥には、癒すことのできない創痕があるはずである。いま「エリスを捨てて」と書いたが、鷗外が切り捨てたものはエリスでなくともいいのである。何故かと言えば、エリスこそ、豊太郎という人間の内部構造の秩序化の化身であるからに他ならない。豊太郎の痛恨は、精神の秩序化の端緒を開いた己れの自我を、自からの手でつぶしてしまった事である。それはそのまま鷗外と置きかえる事が可能であらう。

帰国後の鷗外は、得たものと失なつたものを十分計量し、自己の精神内部に位置づける時間を持ち得なかったし、時代もまたそれを許さな

ったといえよう。「傍觀機関」論争、「没理想」論争と、啓蒙期の中で「一党の翳」は忘れさられ、知を振り廻さざるを得なかったのである。やがて小倉左遷という鷗外にとっての最初の挫折に遭遇した時、かつての創痕は甦って来たと考えられる。その後の鷗外は人仮面Vを被って生きざるを得ない。年令から地位から言っても、その発言は複雑なねじれを帯びてくるのである。小倉左遷の時辞意を考えたと鷗外が、補充条例改正で再度辞意を表明した点を考慮すると、荒涼とした精神風景が窺えよう。再び『舞姫』の世界と対決せざるを得なくなってくる。かくして人生の危機に遭遇する度に『舞姫』の復讐を受け、怨念の一刀を浴びざるを得なくなってくるのである。『舞姫』で切り捨てた自己の醜惡な心と対決せざるを得なくなってくるのである。未来に何物にも動揺しない悟達の境地を夢想しつつ、現実には自己の暗黒の世界と対面し、剔出するという冒険をあえてするのである。それを避けては悟達し得ないのである。『灰燼』が、竹盛天雄氏の指摘の通り、節藏の生きた時間と小倉左遷との重り合いは偶然ではないのである。(注13)『灰燼』はこのような状況の中で構想されたのであろう、と考えられる。

当時の鷗外にとって内実のある生き方の探求こそ切実な問題であった事は言うまでもない。その意味で、平面の思想ではなく、融通無礙なる絶対境からの人生把握という垂直の思想の獲得こそ、生きる内実をさぐる上で必要であったと言えよう。

原点に立って縦軸上の一地点を望み見ているものに『鶏』がある。石田少佐の意識的に小事にかかずらわれない態度を下限とするならば、上限

は『百物語』であろう。この作品は『灰燼』が発表された同月に「中央公論」に掲載されたという点で注目に価しよう。しかも、執筆完了は日記に依ると、九月二十四日となっているから『灰燼』執筆とほぼ同時であろう。この作品は飾磨屋なる人物の百物語当日の行動に焦点を絞りながら、不気味な傍觀者の一面を覗かせている。この超俗的な飾磨屋の目こそ、一応縦軸上の上限ではなからうか。同様の事が『仮面』の杉村博士の「家畜の群の凡俗を離れて、意志を強くして、貴族的に、高尚に、寂しい、高い処に身を置きたいといふのだ。その高尚な人物は仮面を被つてゐる。」という生き方にも通じてこよう。これらは縦軸上の獲得した一地点である事は疑いのない事実であるにしても、原点からこの地点までを完全に領略し得てはいない。途中の喪失があるのである。そこで、『百物語』を引き合いにだすと、「飾磨屋は、どうかした場合に、どうかした無形の創痕を受けてそれが癒えずにゐるために、傍觀者になつたのではあるまいか。」といっている点に注目したい。ここでは完成されてしまっている傍觀者の外形のみを写し出している。勿論注意しなければならぬのは、作者は傍觀者を「有道者の面目」と解している事である。このように鷗外が、絶対境からの人生把握を志向すればするほど、自からの精神内部の秩序化の萌芽を、自からの手で葬った人醜惡な心Vと対決せざるを得ないのである。その事は高みに達したいという彼岸へ行く過程なのである。それ故、一人の男の思想並びに行動を通して、虚無的な人間へと変貌して行く一知識人の精神の發展状況と精神構造とを描いてみようと思つた時、山口節藏なる人物の造型となつて来たのである

う。他人がすべてのものを肯定しているのを見て「気の毒な奴」と同情し、「馬鹿な奴」と軽蔑した地点から、「反応」が「頭に起らない」境地に達して行く変貌の過程をたどる事によって、醒めた人間の有り様と、その持っている不気味さを描き出すことにテーマはあったと言えよう。しかしながら、この発展史の展望を「いつ変るともなく変つて」来たとか、「醒覚した」という叙述で一挙に圧縮してしまい、発展史の展望を不可能にしてしまっている。それは回想ののっけから、醒めた男という典型的な個性として造型を与えられて、發展的に動く余地が与えられていない事は惜しまれる。鷗外の方法は平面に動いても、中々垂直に動かないようだ。(注14) せっかく奥行のある広大なロマンを構想しながらも、最初の目論見と違つて垂直線上を段階的、發展的に扱えられていない。それは、醜悪な心をみつめる主体のあいまさの故なのか。主体と対象の距離に短絡があつて、作者の素顔がちらついている点にも問題が残るのではなからうか。しかしながら、節蔵造型については小泉純一などと違って、かなりむずかしい所に来ている事も事実である。稲垣達郎先生は「次第に作者の手から離れてひとり歩きをはじめようとしている。小泉純一などを自由に制御し得たのとは、少し勝手がちがおうとしているのである。」(注15)と言っている。ただし、その通りであろう。種々の欠点を内包しながらも、即物的合理主義の立場からする徹底的な権威否定を地とする作品となっており、そこに山口節蔵の魅力もある事は事実である。しかし、『灰燼』は作者が意図したものが、十分形象化されていない恨みが残ることも事実である。その意味で失敗作

だとするならば、鷗外自身甘んじて受けなければならないだろう。当然『青年』もそうであろうし、『かのやうに』もまたしかりであろう。主体と方法の乖離という事を責めるのは酷のような気がする。窮極の所、公状況において国家と関わりと作家として完成を見ないのが常である。二葉亭四迷や北村透谷しかりであろう。志賀直哉や小さいけれど、梶井基次郎と違って鷗外もまた完成されざる作家であつたと言えよう。国体や国家という幻想の中で、自己の実存を確めようとすれば、するほど、遠くへ振り廻わされるのは必至である。中世的な倫理的基盤と近代的合理精神を同時に合せ持ちながら、この乖離の上に立つて仕事をしていたのである。そこに鷗外の偉大さと不気味さがあつたと言えよう。その意味で、鷗外の悲劇は、官僚にして作家であつたその事に帰せられよう。

一体この小説が醒めた男の精神のあり様と不気味さを中核にしているとするならば、題名の『灰燼』とはどのような意味合いを持つて来るのであろうか。竹盛天雄氏は「鷗外の終生をつらぬく時々刻々の挫折感を土台にした主人公、山口節蔵の運命を、金石文字をきざみこむように最後までえがけなかったという、二重の挫折を意味している。『灰燼』の主題は「挫折」である。それを作そのものの運命としなくてはならなかったとは、鷗外の生涯が、いかに近代日本社会の深い挫折とむすびついていたかを、デスペレートに物語っている。」(注16)と述べているが、あまりに美事であり過ぎる。この点に関して私見を述べてみたい。

現実荒廃する生を、青春を追体験することで恢復しようと試みた時、小山竹次氏の言うごとく、

『青年』、『雁』そして『灰燼』、これらの諸作には根本的に共通の主題がある。「青春」である。(中略) 鷗外の現代長篇諸作がこのように「青春」を共通の根本主題とするのは、初期の『舞姫』に描かれたようにして失われた青春に対する哀惜から発して、鷗外のなかを「暗渠」となつて流れてゐる創作衝動(福永武彦)によるのかもしれない。そして三篇がいずれも、何らかの意味において挫折する青春を描いていることは特徴的である。『雁』ではお玉の恋と自我の目ざめが圧殺され、『青年』では純一が愛のない肉の閱歷に青春を失い、『灰燼』ではまた性欲にもとづく青春の挫折が回想されるようである。

とすれば、(注17) まさしく、『灰燼』こそ  $\wedge$ 二重の挫折 $\vee$ をライトモチーフにしていると言える。私には  $\wedge$ 二重の挫折 $\vee$ のよつてきたる所が、『舞姫』の復讐だと思われてならない。自分からの  $\wedge$ 近代 $\vee$ を自からの手で葬り、自からの  $\wedge$ 醜惡な心 $\vee$ に目を背けたが為に、身を切り苛まれなければならなかったのである。それ故に、知命を迎えた鷗外の悲劇は大きいと言わざるを得ないのである。鷗外にとつて荒涼たる心情を払拭し、生の恢復を図ることは不可能であらうか。

鷗外は漱石と違つて  $\wedge$ 情 $\vee$ を描きながらも、 $\wedge$ 知 $\vee$ に絶対の信を置いている所のある作家である。デスペレートな心情を癒し、はたまた『舞姫』を源とする怨念から脱出する唯一の方法、すなわち、生の充実を望む天啓の声は、理想的人間像の追求という方向を発見するのである、自からの生を一旦置いておいて、他者の生を追求するという迂回の道をたどるのである。『灰燼』で『舞姫』の怨念の業火を浴びたが故に、貪者

の一燈を掲げて己れの人生を歩んだ人々に、属目し始めるのである。その意味でも『灰燼』は、鷗外が辿らなければならない道程の一里塚であつたと思われる。『冬の王』を端緒として、『羽鳥千尋』・『鏈一下』も同一線上にあらう。しかしながら、この道は一直線に延びては行かない。屈折を辿りながら、やがて他者の人生に己れの人生が合致した時こそ、鷗外は積年の怨念の呪縛から解きほぐされるのである。因に、『仮面』や『百物語』に見られる傍觀者の悟達の境地が一步飛躍すると、『枯寂の空』なる仏老の絶対境にならう。ここに『寒山拾得』が書かれなければならない意味が存在するのであらう。しかし、描いた所で結局超人間でありすぎた故に、抽斎像が創定されなければならなかったのである。『洪江抽斎』こそ、抽斎と鷗外の人生とが合致した所に成立したのである。

とまれ、『灰燼』には肯定即迷妄と観じ、すべてのものを否定して生きて行く節藏と、すべてのものに私意を加えずにあるがまま肯定して、融通無礙なる立場から人生を把握して生きる節藏を越えた境涯の夢とを、合わせて希求するという二重構造を托されていたと思う。それ故に、『灰燼』の持っているこの不死鳥の意味を、『灰燼』存在の大きな意義として認めたい。





で、なお①殉死興業、②忠誠譚に反する祖先譚を描いたことは、とりもなおさず鷗外のシニカルな目であろう。

11 槌田満文氏は、「鷗外の空間的エキゾティシズムは、時間的エキゾティシズムに向かう前に、現代の日本以外の世界に対象を求めようとした。」と述べ、『灰燼』の「新聞国」の構想に対して、「時間・空間の設定されていないこの「新聞国」は、鷗外の時間的エキゾティシズムを、過去へではなく未来へ発展させる可能性をはらむものであった。しかしそれが途中で挫折してしまったことは、高橋義孝のいう「新しいとともに古くさい明治人」鷗外の想像力の限界を示すものであつたらう。」とも言っている。更に、鷗外は時間的エキゾティシズムを過去へ屈折させる前に、諷刺小説・寓意小説をふくむ「灰燼」と、自伝小説的・歴史小説的な「雁」の二つを同時に試みた。前向きと後ろ向きとともに志向しながら、想像力に乏しく、考証癖の強い鷗外は、現代をありのままに書けない「種々の周囲の状況」（波江抽斎）のために、乃木大将殉死事件に触発されて、一挙に時間的エキゾティシズムを江戸時代に向けていったとみるべきであろう。

12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100 101 102 103 104 105 106 107 108 109 110 111 112 113 114 115 116 117 118 119 120 121 122 123 124 125 126 127 128 129 130 131 132 133 134 135 136 137 138 139 140 141 142 143 144 145 146 147 148 149 150 151 152 153 154 155 156 157 158 159 160 161 162 163 164 165 166 167 168 169 170 171 172 173 174 175 176 177 178 179 180 181 182 183 184 185 186 187 188 189 190 191 192 193 194 195 196 197 198 199 200 201 202 203 204 205 206 207 208 209 210 211 212 213 214 215 216 217 218 219 220 221 222 223 224 225 226 227 228 229 230 231 232 233 234 235 236 237 238 239 240 241 242 243 244 245 246 247 248 249 250 251 252 253 254 255 256 257 258 259 260 261 262 263 264 265 266 267 268 269 270 271 272 273 274 275 276 277 278 279 280 281 282 283 284 285 286 287 288 289 290 291 292 293 294 295 296 297 298 299 300 301 302 303 304 305 306 307 308 309 310 311 312 313 314 315 316 317 318 319 320 321 322 323 324 325 326 327 328 329 330 331 332 333 334 335 336 337 338 339 340 341 342 343 344 345 346 347 348 349 350 351 352 353 354 355 356 357 358 359 360 361 362 363 364 365 366 367 368 369 370 371 372 373 374 375 376 377 378 379 380 381 382 383 384 385 386 387 388 389 390 391 392 393 394 395 396 397 398 399 400 401 402 403 404 405 406 407 408 409 410 411 412 413 414 415 416 417 418 419 420 421 422 423 424 425 426 427 428 429 430 431 432 433 434 435 436 437 438 439 440 441 442 443 444 445 446 447 448 449 450 451 452 453 454 455 456 457 458 459 460 461 462 463 464 465 466 467 468 469 470 471 472 473 474 475 476 477 478 479 480 481 482 483 484 485 486 487 488 489 490 491 492 493 494 495 496 497 498 499 500 501 502 503 504 505 506 507 508 509 510 511 512 513 514 515 516 517 518 519 520 521 522 523 524 525 526 527 528 529 530 531 532 533 534 535 536 537 538 539 540 541 542 543 544 545 546 547 548 549 550 551 552 553 554 555 556 557 558 559 560 561 562 563 564 565 566 567 568 569 570 571 572 573 574 575 576 577 578 579 580 581 582 583 584 585 586 587 588 589 590 591 592 593 594 595 596 597 598 599 600 601 602 603 604 605 606 607 608 609 610 611 612 613 614 615 616 617 618 619 620 621 622 623 624 625 626 627 628 629 630 631 632 633 634 635 636 637 638 639 640 641 642 643 644 645 646 647 648 649 650 651 652 653 654 655 656 657 658 659 660 661 662 663 664 665 666 667 668 669 670 671 672 673 674 675 676 677 678 679 680 681 682 683 684 685 686 687 688 689 690 691 692 693 694 695 696 697 698 699 700 701 702 703 704 705 706 707 708 709 710 711 712 713 714 715 716 717 718 719 720 721 722 723 724 725 726 727 728 729 730 731 732 733 734 735 736 737 738 739 740 741 742 743 744 745 746 747 748 749 750 751 752 753 754 755 756 757 758 759 760 761 762 763 764 765 766 767 768 769 770 771 772 773 774 775 776 777 778 779 780 781 782 783 784 785 786 787 788 789 790 791 792 793 794 795 796 797 798 799 800 801 802 803 804 805 806 807 808 809 810 811 812 813 814 815 816 817 818 819 820 821 822 823 824 825 826 827 828 829 830 831 832 833 834 835 836 837 838 839 840 841 842 843 844 845 846 847 848 849 850 851 852 853 854 855 856 857 858 859 860 861 862 863 864 865 866 867 868 869 870 871 872 873 874 875 876 877 878 879 880 881 882 883 884 885 886 887 888 889 890 891 892 893 894 895 896 897 898 899 900 901 902 903 904 905 906 907 908 909 910 911 912 913 914 915 916 917 918 919 920 921 922 923 924 925 926 927 928 929 930 931 932 933 934 935 936 937 938 939 940 941 942 943 944 945 946 947 948 949 950 951 952 953 954 955 956 957 958 959 960 961 962 963 964 965 966 967 968 969 970 971 972 973 974 975 976 977 978 979 980 981 982 983 984 985 986 987 988 989 990 991 992 993 994 995 996 997 998 999 1000

講談社文庫『雁』所収の稲垣達郎『鷗外の人と文学』——『雁』の解説を中心に——、一四四頁。

注9の論文に同じ。一六頁。

注10の論文の中で、磯貝氏は「論理が、だいたいにおいて、三段論法的な平面論理の範囲にあることも注意されることである。こういう知性は、理論の整理に大きな役わりをはたすが、主体の内部の要求と結びつかないかぎり、実質を持った思想とはならない。この傍観的知性が思想を対象化しようとするとき、パノラマ的展望図をつくって、そこで止まってしまいうのも、そのことにかかわっているわけである。」と云っている。一一頁。

「国文学」（第一巻第四号、昭和三十一年十月号）所収の稲垣達郎『鷗外の現代小説について』、一二六頁。

注9の論文に同じ。一一頁。

17 「文学」（第三十七巻第八号、昭和四十四年八月）所収の小山竹次『鷗外・『灰燼』について』三九頁。

## 附記

本論考は日本近代文学会二月例会（昭和四十四年二月二十二日、於昭和女子大）に於いて、『灰燼』（森鷗外）試論」として発表されたものを改稿したものである。なんといっても、蒲生芳郎氏の論文に啓発されるところ大でした。研究発表に際しては、稲垣達郎先生の御指導を戴き、発表当日司会をしていただいた小泉浩一郎氏、質疑の中で、成瀬正勝氏から鷗外の創造力について、紅野敏郎先生からボウについて御指導を戴き、後にボウについては菊地久治氏から、その他「評言と構想」の会の諸氏にも御教示を戴いたことをここに記るして、感謝の意を表したい。